

その他の

山国育ちの誠実は酬いられる

戦争末期は海上特攻隊

愛知県 今井 釜 吉

私は大正六年十二月十九日、岐阜県飛騨の益田郡川西村（現萩原市）に生まれました。昭和十三年徴集兵（十二月生まれは翌年回し）で、同級生の大部分は一年先に入営したのです。村では二十八人兵隊検査を受け、甲種合格は八人で、私はその中の一人でした。子供の時から山仕事をし「背負いこ」を担いで作業が多く、体格と体力には自信がありました。

子供のころに、高山線の金山～萩原までが、昭和七

年に開通、小坂までは八年の半ばに線路が開通し、高山線の富山までの全開通は昭和十年か十一年であったように記憶しております。父の羨は厳しかったが、農学校へ入学させてくれました。小学校の同級生は九人です。乙種三年間なのですが、その上は高山まで通学せねばならない。高山までは列車も開通していないので徒歩通学以外はないのです。山国ですから冬は雪が胸ぐらい積り、歩行もできない状況です。

乙種学校では私は三回生、家から六キロぐらいあるがもちろん徒歩での通学です。校長は立派な方だが、授業の始まる前、武道場で剣道の寒稽古、早朝といっても遅刻は許されない。そのしごきというか、身をもつての教育が、私の将来に役立ったことは後で分かりました。

学校を卒業したのが十七歳、といっても山国では仕事がない。親類の勧めというか、伝手で朝鮮(現韓国)へ就職することになったのです。朝、家を出発、夜岐阜の親戚の家へ、そして兄弟同行で先生の家へ。翌日岐阜の街を見物させて頂き、その間先生から励まされました。夜岐阜駅発、翌朝下関着、さらに玄海灘を渡り釜山へ、何しろ初めての一人旅です。

心細い限りだが、校長先生から、移動警官がいて取り調べを受けるから、朝鮮の行き先からの手紙などは見せない、と注意をされていました。お陰で無事検閲も済みますことができました。しかし、海は荒れ釜山まで八時間ぐらいかかってしまいました。夕方上陸、列車で目的地京城に着いたのは翌朝六時半、現在考えると嘘のような話です。

京城の行く先は、私の生家の近所の名門の方の長兄(三十六、七歳でしょうか)経営の「甲州物産」という店でした。その方は部落の出世頭といわれていた人です。

私の生まれた川西村は狭い所、特に私は三男坊、外

地に新天地を求めるより仕方ないわけです。その方の弟は、陸大の銀時計組の方で、堀少将のお嬢さんを嫁にされている、当時は参謀本部に在職中でした。

そのような関係で、父は私を朝鮮に出したのです。そこで一カ年間、みっちり修業をさせられました。しかし、奥さんはなかなか厳しい方で、私は少し反抗しました。そのとき、弟さんの広瀬少佐(参謀)が見えられ、私に竜山(師団司令部)の将校関係の偕交社への勤務を勧めてくださった。

このようなことが、私の入営してからの軍隊生活に影響を及ぼすこととなったのです。私は、偕交社の判任官宿舎に泊つての勤務です。主席の少佐の下で厳しく教育されました。一分でも遅刻は許されません。ズボンの折目がきちんと付いていないと、敬礼も受けてもらえない、罰として、窓硝子に糊を塗り、その硝子が少しの曇りがなくなるまで磨かされるのです。靴磨きを通じての精神教育もありました。この過酷なほどの教育が私にとっては後に役立つわけです。

偕交社には小磯軍司令官や今村均旅団長も度々見え

ました。山下奉文旅団長のお顔はこわかつたが、お話をすると随分優しくした。徴兵検査を受ける前、広瀬中佐も来られた。朝鮮の第七十七、七十八連隊もある富山の連隊へ入営しなくてもよいのではないか、暗に現地での入営を勧められていた。

また、軍司令官の副官高木中佐に、入営前になってから「富山の連隊は故郷ですから入ります」と申しますと、「龍山の連隊へ入営しろ」といわれました。両中佐から、そこまで親切に勧められたことは、有り難いことだと身に染みました。

しかし、第九師団の歩兵第三十五連隊は、我々飛驒の者と富山県が徴集地区です。また、日露戦争があったときは第三軍軍司令官、乃木希典大将直轄で、厳しい連隊だが名誉ある、有名な連隊です。結局、私は富山へ帰って入営しました。

入営は昭和十四年五月一日でした。初年兵教育中の六月ころ、手紙が来て、裏に高木中佐と書いてある。

班長に、開封して読まされました。文中には山下閣下のことも書いてあり、中隊長室にも呼ばれて、高木中

佐や山下閣下との関係など聞かれました。

そのため、私は踏ん張って訓練も受けました。そのためか、一期の検閲が済むと他の同年兵は中支へ転属（当時富山の連隊は補充隊）し、私は初年兵教育の助手として残されました。そのため、中支へ行った同年兵のほとんどは負傷したり戦死した者もいました。一選抜で上等兵になったが、昭和十五年十一月、師団はそっくり満州へ移駐しました。

最初の駐屯地は牡丹江省樺林^{なかりん}で、六、七カ月いました。その後、部隊全部が国境警備のため老黒山へ移動しました。そこは兵舎も何もない所です。もう秋も近い、満州の冬は早いので兵舎の手造りにかかる。地下二メートルぐらい掘って、木で枠を作り土留めをし、兵舎を造るのですが、屋根だけが地上に出ている。屋根に二メートルごとに窓を作り明かり取りにするのです。中はストーブを焚くから冬は暖かく、夏は涼しいのです。兵舎へは階段を下りて入って行きます。

そこが部隊の基地となり、昭和十七年四月までいました。昭和十六年十二月の大東亜戦開戦はその兵舎で

聞きました。任務はソ連との国境警備と敵情の監視です。兵舎から二十キロぐらい先、川幅百キロへだててソ連領です。国境の警備区域は十五キロぐらい、そこにトーチカを造り敵情を監視するのです。

A地点からB地点へとトラックが何台通るかなどを報告する。その場所は断崖ですが突き出ているので敵が侵入しやすい地形です。日本軍は偵察班の将校が三人ぐらい、国境を越え、真夜中の一時から三時ぐらいに潜入する。出発、国境線通過と帰る時間はチャンとチェックしてあり、その間は発砲しないのです。

しかし、敵方も潜入してくることもある。あるとき、昼だが鳥の巣を撃つたら、ソ連兵が自分が撃たれたと思ひ飛び出してきました。みると日本軍と同じ服装をしていたのです。また、私が巡察中二人の侵入者を捕らえました。相手は投降兵でした。二、三日後、取り調べた通訳の話では、飢えてソ連軍の食糧倉庫に盗みに入り捕まったといっています。しかし、ソ連軍は厳しい処罰をするし、軍法会議ではすぐ「死刑」と宣告され殺される、そのための逃亡、投降したのだといえます。

冬は零下三五〜四〇度ぐらいになります。冬場の仕事は、白樺やヒマラヤ杉の大木を伐採し、燃料作りや凍った人糞を「もっこ」に入れて捨てる作業です。しかし、耐寒演習が、内地の秋季演習のようにあるのです。

昭和十五年春、私は四年兵になり、第九師団は満州駐留が続きましたが、四月二十二日、富山の立野原演習場の廠舎で満期除隊となりました。その前、敦賀で列車が止まり、自警団や消防団が出ている。これは何かあったのかと思いました。後で分かったことですが、米空軍の最初の空襲だったのです。故郷萩原町へ帰ると、龍山の倍交社から復職するよう書状がきました。入営中、留守の家が手厚くしていただいたが、結局は名古屋の大同製鋼へ五月から勤めることとなり、戦後、定年まで在職することとなりました。

次に再召集のことで、昭和十九年九月二日召集令状がきました。私は結婚し、妻は臨月というときでした。戦局も段々と悪化していたので覚悟はしていましたが、本心後顧の憂いはありません。「いよいよき

たか」という気持ちでありました。

場所は名古屋の第十三部隊（輜重兵第三連隊の跡）で、新設部隊です。その日は下士官だけでしたが、翌三日には兵隊が入ってきました。不思議に思えたことですが、あらゆる兵科の兵長と上等兵、しかも岐阜と静岡県の現役兵です。

そこで、その兵隊の選考がなされました。長男でない者、思想堅固で健康体の者二四二、三人で一個中隊が編成された。兵器が支給されたが下士官は軍刀と拳銃、被服は夏服でした。だれ言うともなく、デマカもしれぬが、「サイパン島奪回の決死部隊」ではないかと、ささやかれていました。

名古屋の第十三部隊には約十日間ぐらいいて、夜中部隊の裏門から、名古屋城の裏道を通って、こっそりと貨物駅から客車に乗せられました。全部で三個中隊ぐらいの兵力であったかと思えます。

中隊長は大尉、隊付、小隊長は少尉と見習士官、指揮班長は准尉です。私は分隊長。列車は広島着、中学校で宿営して二週間ぐらいいました。その間に鯛尾と

いう島で特訓を受けました。高い櫓から救命胴衣（カボックの入った）をつけて海へ飛び込む。小発（小型発動機船）に乗って、走行中に海に飛び込む、という特殊な訓練の連続でした。

その後十月半ばころ、広島を出て大阪湾で輸送船に乗船しましたが、あちこち、方々で、いろいろな部隊を寄せ集め、四千人ぐらいが乗船しました。まさに超満員で、便所に行く階段まで寝るという状態でした。その中に、アメリバ赤痢で下痢患者も出たのです。

大阪港を出て、四、五日かかって台湾の基隆港に着岸。他の輸送船は支那の沿岸を行ったのですが、オトリのようになつて四隻ぐらい沈没したといひます。その船には台湾で使う襲撃用の舟艇や、爆薬類が積んであり、それが全部沈んでしまったのです。我々の船は兵隊だけで、機材や火薬類は積んでいなかったのです。基隆へ上陸し、鉄道と行軍で高雄へ、花蓮港の手前の林辺で終着し、七里溪という所で駐屯しました。

我々の部隊は、海上挺進特別攻撃隊、正式には挺進戦隊といひますが、陸軍の特別攻撃隊なのです。しか

し、前にも申したように、大部分の舟艇、機材、火薬は輸送船もろとも沈没したので、舟艇は三〇隻ぐらゐしかこなかったのです。

この特攻舟艇は、幅二・五メートル、長さ四・五メートルぐらゐ、爆弾を両脇に抱え、突進し、敵艦船目掛けて特攻するのです。船にはほとんど鉄は使っていない。船の真ん中にあるトラックのエンジンと、船の尖端にあるT字型金具、ワイヤーのみ鉄製で、ほかは竹か木でした。日本の物資、材料も乏しくなっていたのです。

特攻舟艇は目標の敵艦船へ突進し、近付いたらハンドルを蝶捻子で目標にぶつけるように止め、両側の爆弾に信管を付ける。敵船団の集結している所を、下駄履（フロート）の海軍機が偵察して知らせる。

当初は詳報によると何隻かを爆砕し、大変成功をしました。そのため米軍は警戒と対策を加え、我が特攻舟艇に対し機銃掃射を加え、我が軍の犠牲も多くなってきました。我々の部隊には学徒兵の軍曹、曹長が入ってきました。特攻の前日には遺書を書く、作戦が終

了すると遺書を部隊で集め、また次の作戦時から遺書を書くのだから、その都度書くのでだんだん慣れっこになってきました。

【解説】

この特攻艇は海軍の震洋隊の陸軍隊というものです。震洋一型は、全長六メートル、幅一・六五メートル、速力二三ノット、爆薬三百キロ、一二センチロケット砲一、乗員一名です。同五型は一三機銃も装備し、乗員二名。

震洋隊は最初のころは、五五隻で一隊を編成され、その後、一型四四隻、五型四隻の計五四隻、予備艇一型四隻、合計五二隻とされた（昭和二十年六月一日編成標準）、そして、終戦時には震洋隊編成の総数は一一四隊と記録されている。

台湾の様相もだんだんと厳しくなり、昭和十九年十月十二日には、米機動部隊が延べ一千機をもって台湾全土を空襲、その日から台湾沖航空戦が開始され、十

六日ころまで続いたようです。我々は米軍の上陸を警戒していたが、特に上陸し易い西海岸の比島寄りの、遠浅の海岸付近で、米飛行機の残骸が多くあつたように記憶します。ですからマッカーサー軍も被害が多く、一時、体制を建て直していたとも聞いています。

我々部隊の根拠地である七里溪では三個中隊バラバラに兵舎を建てていましたが、ハブやサソリが多かった。我々は森やジャングルの中にいて敵空襲を避けていたので、蛇や毒虫にやられました。ハブは地中と木の上にいる。夜、兵舎移動するとき、カンテラをつけて歩くが、ハブはカンテラに向かって飛び付いてくる。大蛇は食糧として食べたこともあります。また、マラリヤ、 Dengue 熱のため死んだ戦友もいました。敵機だけが敵ではなかったのです。

昭和二十年三月ころになると、米海軍機のグラマンの空襲で、太陽が見えないほど来襲しました。初めは台湾がやられ、そのうち敵の目標は沖繩に変更したようです。終戦時には七里溪の獅子頭という所に陣地を作りました。舟艇を山の横穴に入れておき、出陣のと

きはトロッコ線路に舟艇を乗せ押し出し、爆弾を付けて出動するのです。これは真夜中にやるのです。

終戦を聞いたのは八月十六日でした。その前に通信の兵隊が、傍受したのか「戦争は終わったらしい」と話すのを聞きました。また、八月十三日ころから空襲がなくなり、飛行機も全く来なくなつて、「これはおかしい」と思っていました。これで我々は帰れるのか、米国へ連れて行かれるのかも、など憶測をしていました。中隊長は涙を流しながら「今日の屈辱は孫子の代まで言い伝えるよ」と言われました。

安藤軍司令官は自決されました。民衆の反乱もありました。そのため皆兵器をもち、トラックには機関銃を乗せ警備をしていたのですが、枋山飛行場跡の兵舎に分散し蒋介石軍によつて武装解除されました。当時の復員は南方面の食糧事情の悪い、体力消耗、病に冒された兵隊の多い部隊から実施するので、我々台湾部隊の帰還は遅れるであろうと推測されていました。そのため、数年間生き抜くための自給、自活態勢をとるべく指導されていたようです。

しかし、悪い予想に反して、昭和二十一年三月、復員命令が出て、急遽出発、三月十七日大竹（海兵団のある）港に上陸したのです。身体検査などの後十九日出発、岐阜県飛騨の萩原町の実家に帰ったのは二十三日です。

召集出征のとき、臨月だったその子供がもう三歳になっていました。その日は未知の父親を見て泣いて逃げる始末です。何とか手なずけて待ちに待った父子相擁しての感激を味わいたいと思いました。私は台湾から衣料、食糧などを背負って帰ってきましたので、金米糖や菓子などを手渡し、やっと子供を手なづけることができました。

大同製鋼に復員のあいさつに行き、職場に復職、軍隊生活にも増して刻苦勉強し、ようやく安定したころ、昭和三十四年九月二十六日、あの悲惨な暴風雨、伊勢湾台風に襲われました。上手の堤防が決壊、湾内の貯木材は水車のごとく狂いながら我々の街を壊滅させたのです。大自然の脅威をあの時ほど感じたことはありません。

自宅も本屋根の上から瓦三枚目までドブブリ水に冒され、家は水没でした。当時私は町内会長をしており、我が家のみを顧みてはられませんでした。町内の死亡は六十九名、海上特攻で生き残った私でしたが、よくぞ生きられたと、いまでも思います。もう三十五年も前のこと。まさに歴史は光陰矢のごとく遠ざかっていきました。

【解 説】

今井さんの海上特攻隊とは、正式には海上推進戦隊という部隊です。推進隊は第一から第三十戦隊まで。

同基地隊本部は第一から第五まで。海上挺進基地大隊は第一から第三十大隊まで編成されています。基地大隊の秘匿名は「港湾設定隊」と称せられていました。これら部隊の編成は次のごとくです。

昭和十九年八月九日、軍令甲第一〇七号により、海上挺身部隊第一次編成がなされた。

注 海上挺進戦隊一〇、同基地隊本部一、同基地大隊一〇を編成。海上挺進戦隊六、基地隊本部一、同基

地大隊六を第十四方面軍（比島）に、挺進戦隊四、同基地大隊四を第三十二軍（沖繩）戦闘序列に編入（命第一〇〇六号）。

昭和十九年八月三十一日、軍令甲第一二〇号により、海上挺進部隊第二次臨時編成がなされた。

注 海上挺進戦隊二〇、同基地隊本部四、同基地大隊二〇を編成。次の如く戦闘序列に編入（命第一一三八号）。

区	分	第14方面軍	台湾軍	第32軍
海上挺進戦隊	一〇	五	五	五
同基地隊本部	二	一	一	一
同基地大隊	一〇	五	五	五

である。今井さん所屬の台湾軍（後の第十方面軍）には、海上挺進戦隊 五、海上挺進基地隊本部 一、同基地大隊 一、が編入されたのである。

生死は紙一重

ノモンハンと台湾沖

滋賀県 渡邊 進

私は大正六年四月十日、大阪市大正区大正通六丁目一〇六（当時）、父甚一の長男として生まれました。家族は父母、弟二人、使用人四人の牛乳販売店の家の長男であります。

昭和十二年徴集で甲種合格、入営は同十三年一月十日、和歌山の加太の重砲兵連隊へ入営しましたが、一カ月後身体検査があり、胸部疾患で帰されました。このため私の軍歴にはそのことが記入されず、軍歴とはなっていません。しかし、改めて徴兵検査はありませんでした。昭和十三年一月に動員がかかり、和歌山から満州の阿城へ部隊は移動しました。そこで改めて身体検査があり私は満州行きから除外され、帰郷にされたことが後で分かりました。和歌山には重砲兵連隊が